

翻邪三帰法について

大澤 伸雄

唐の道宣は、本来仏陀は一つの戒律を説き、それこそが大乗の戒律であるとの確信のもとに、中国における戒学の体系化を志したのであるが、彼は在家信者に対して如何なる見方をしていたか。優婆塞となるための受戒法は四分律には詳説されていないが、道宣はこれをどう考えたのか。これらの点について考察するためには、四分律行事鈔を中心として、隨機羯磨疏等を検討する必要がある。行事鈔の導俗化方篇において受五戒法が述べられているが、この受五戒法以前に翻邪三帰について述べているので、本論では翻邪三帰について若干の考察を試みたい。

在家大衆が教化されて信者となる場合、行道の上でまず第一に考えられることが三帰依である。これを道宣は毘尼母経を引用して、「有_三五種三帰、一翻邪、二五戒、三八戒、四十戒、五具戒」と定義づけているが、翻邪三帰については、その制意を涅槃経から引用して、「一切衆生怖畏生死四魔、故受_三三帰。」としている。煩惱・陰・死・他化自在天の四魔の侵凌からの救護を願つて、三宝に対して帰依をなすのであるという。また羯磨疏では、「論云。我境即四念処、他境即五欲也。我教謂心師也、他教謂師心也。」とし、ここでは五欲を自覚して、身・受・心・法の四念処という四種の觀法を通して教に理解をもち、その上で仏道に帰趣すべきであると考え

ている。一般大衆にはまず四念処が理解されている必要があるといえよう。

次に翻邪三帰の作法について智度論を引用し、まず互跪合掌して比丘等の五衆の前において、作法を学んでから、三帰三唱をなせば、「即發_三善法」としている。この「善法」の意義について資持記（元照）では、「言_三發善、明_レ非_レ戒也」としている。そして引き続き三帰三竟するわけであるが、道宣は薩婆多論を引用して「若淨重心、具_三教無教」としている。これにつき羯磨疏では、

有_三論者言。教無教性此就_レ所發教之業。從_レ体明_レ性故、若淨重心有_三無教也。無教者此明_レ業体一_レ發統現不_レ假_レ緣辨。無_レ由_レ教示_レ方有_レ成用、即体任運能酬_三來世_二故云_三無教。

としており、具体的には身業に互跪合掌、口業に三帰三竟であるけれども、そこに在家信者となる基本的な教法が領解されれば、意業は淨重心となるはずであり、それは「一發統現」であり、業体は任運するものであるというのである。また羯磨疏には、

善_三五陰為_レ性者、色身恭敬識想受中緣_レ法翹注竝由_三善本_二便生_三善行無貪等_三三摺_レ御斯法_二、能生_三後有_レ故因得_レ名也。由_レ諸衆生依法受_レ帰、隨_レ其心力有_三善業起_二扶_レ助形命_一。若輕淨心体は無記不_レ發無作

とある。これは五陰においても、色身において恭敬し、識・想・受が法に正しく依つたところの心力によつて、善行としての三善根を生ずることがあつて、輕淨心でなければ無作（無教）を生ずるとするのである。以上の如く四魔・四念処等の在家者としての基本的な教法を領解し、真摯に三帰依法を受ければ、三業の上からも五陰の上からみても善は惹起されるが、また自己に対する反省が深刻と

なる。そこで懺悔法の必要性を示すが、「以_レ信_レ邪來久妄造_レ非法、今創掃投必翻_レ邪業」という懺悔の自覚が必要となる。「阿含等經並令_レ先悔_レ」としているが、これは五戒・八戒の受戒の場合の三帰依であり、道宣は智度論の所説に従つているとしている。次に涅槃經を引用して、「涅槃云。發_レ露諸惡、從_レ生死際所_レ作諸惡悉皆發露、至_レ無至_レ処」とまで述べている。何よりも懺法の重要性を強調しているが、具体的な懺悔法については「必論_レ設_レ懺、隨時誦習亦得_レ通用_レ」とするのみで、これは道宣においては具体的な作法を確定してはなかつたか、または自明の事と考えていたかであろう。資持記にも「人に逐いて別に述べ」か、「諸經に但三世十惡を懺するが如し」としているのみで具体的には述べられていない。これについて道世の毗尼討要にはやや詳しく述べられているので今はそれに依ると、討要でも翻邪三帰の懺法は「先受_レ三帰、後始_レ懺悔」ということであり、五戒の場合の三帰とは異なるというのである。そしてまず受者に対して、「無始以來無明厚重、不能_レ觀_レ見_レ仏性。以_レ不見_レ故恒於_レ仏前_レ破_レ戒違_レ道、具造_レ諸惡、無_レ過_レ不_レ為、無慚無愧尤重_レ心造。今欲_レ懺除、豈得_レ輕慢。譬如_レ大樹根牙滋茂、若不_レ加_レ功何能除斷。」と述べて、懺悔しようとする在家者に対して「先當_レ奉_レ請_レ三宝、以_レ為_レ良緣、上_レ憑勝境、証成可_レ滅」とまた述べて、「依憑_レ以下を在家者に復唱させるのである。そして「飯_レ命十方一切仏_レ頂_レ禮無_レ辺淨_レ覺_レ海、亦_レ禮_レ妙法不思議_レ眞如自性清_レ藏住_レ於_レ極_レ愛一子地_レ得_レ道得_レ果諸_レ聖人。我_レ以_レ身口清_レ淨意、咸_レ各_レ皈_レ命稽_レ首_レ禮_レ十惡懺法。」と在家者は唱えるのである。そして十惡の具体的な例をあげるが、その一例として「殺生」をあげてみると、

弟子某甲並為_レ一切法界衆生、發_レ露無始以來所作罪業。或殺_レ害君

親及真人羅漢、兵戈征討鋒刃斃戮、遊獵禽獸網捕_レ虫魚。或經作_レ惡王_レ刑罰差濫乃至含靈懷性蠢動凡諸生類殘害煞傷及猛獸鷲鳥遞相噉食

と誦するのである。更に十惡の惡果を述べて、

無始以來十不善業、從_レ煩惱邪見_レ而生。今依_レ仏性正見_レ力_レ故、發露懺悔皆得_レ除滅_レとして、次に發願をあげている。

弟子某甲及一切法界衆生自從_レ今身_レ乃至成_レ仏、願更不_レ造此等諸罪。飯_レ命敬_レ禮、常住_レ三宝_レ懺悔已訖、次以_レ禮懺功德發願_レ願於_レ未來世_レ見_レ無量壽仏無_レ辺功德身、我及余信者既見_レ彼仏_レ已、願得_レ離垢眼_レ成_レ無上菩提_レ。

ここには、三帰依、礼贊、懺法、發願という中国仏教における懺法の儀式法則の一端を示していると考えられるであろう。以上の様な翻邪三帰の受法を通して五戒三帰を行なうのであるが、この相異について道宣は羯磨疏に、

問。前翻邪三帰直爾即授、此五戒婦如何簡略者。答。翻邪背邪初心難_レ拔。欻然廻向宣_レ即引婦。若更覆疎容_レ還_レ旧跡。五戒不_レ爾。先以_レ婦_レ正心性調柔堪_レ思_レ我倒。故須簡略方入_レ道門、以_レ三五体有_レ虧_レ三乘無_レ託、仍隨_レ分受、皆是任_レ時能接_レ機布_レ教可_レ準知_レ也。とあるように、翻邪三帰は「直爾即授」だが五戒三帰は「簡略」しなければならぬという。それは「先以_レ婦_レ正」だからであるとする。以上の通り五戒受持以前において、四魔・四念処等を領解して帰依をなし、三世十惡等の懺法を修めなければならぬのが翻邪三帰ということである。(註略)